芸術祭新聞
1月号
2021.1.25.
松之山地区

松之山地区では二つの団体（松之山地区若手有志、黒倉集落）が、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2021」の作品誘致に取り組んでいます

第三回 北川フラム塾☆地域芸術祭のつくられ方

次回開催は 2/2（火）

12/1（火）に開催されたフラム塾では、大地の芸術祭の総合ディレクターである北川フラム氏と映画監督の山岡信貴氏から、芸術祭への想いやこれまでの取り組み紹介がされました。

山岡氏はこれまでのフラム塾などで北川氏との交流が深まり、今回の登壇が決まったそうです。聴けば聴くほどに、アートへの想いの深さを感じ入るお話がたくさんでした。

芸術祭作品誘致の可否について☆

2021 年開催に向けた作品誘致の可否については、継続して十日町市と総合ディレクターとで検討中です。作品誘致の可否については、これまでの実績を踏まえての新しい在り方の模索に加えて、社会情勢の落ち着かなさもあり、協議に時間を要しているようです。

作品誘致希望団体への連絡は、市の観光交流課からされる予定となっています。今しばらくお待ちください。

北川フラム塾から見えてくる☆大地の芸術祭の背景にある“想い”

ジョン・クルメリング（テキストデザイン浅葉克己）「ステップ イン プラン」
photo NAKAMURA Osamu

- **芸術祭における「機能・要素」**：大地の芸術祭はアートを通して地域づくりを行うことを目指している。このことについて、作品、拠点施設、取り組みそれぞれについて、「機能・要素」という観点から、「通年か不定期か」「地域観光を促進する宿泊ができるか」「地域の人が生きていける雇用を生み出すか」「地域の拠点となる施設かどうか」という視点から紹介された。

  「機能・要素」について、たとえば『「森の学校」キョロロ』では地域の拠点・ショップ・雇用・展示場・通年・食堂、『夢の家』では芸術祭において空き家を活用した初めての作品であること、『三省ハウス』ではショップ・雇用・通年・食堂・宿泊、ということが意図されている。

- **公共予算と芸術祭**：20 年間の実績をふり返りつつ、今後も公共予算で取組んでいく中での「アート×地域づくり」の可能性とは。
  また、縄文時代に在った社会は「人間がすることのベースがアートで、人間のすることの手段が経済活動などであった」のかもしれないことについて、現代社会の中でどれだけ体現していけるのか。

- **芸術×科学**：アーティスト（芸術家）とサイエンティスト（科学者）が対話すること（荒川修作氏のような作品を生み出すこと）が、現代社会を生き抜く力を育むことに繋がるのかもしれない。

- **芸術祭を面白がる**：関わる人が面白がれば何事も面白くなる。「アート×地域づくり」という取り組みを面白がる人が増えれば、芸術祭はもっと面白くなっていく。普通に来て楽しい空間であり、五感を動かすモノがあることについて、美術の根幹としての心が震えるような体験を面白がる人に関わってほしい。

- **北川フラム塾の受講生**：北川フラム塾は、芸術祭の 20 年間の実績をふり返りつつ、年月を重ねる中でマンネリ化したり本来の意図が見失われてしまったりしてきたことについて、芸術祭の在り方を今一度問い直すために開催することになった。（再掲）

サンティアゴ・シエラ「ブラックシンボル」
photo NAKAMURA Osamu

2021 年開催はこれからの取り組みに向けたより長期的なビジョンを作っていくために、「こへび隊やサポーターと共に前進していきたい」と北川氏は語っている。また、この想いについて深く学び共有したフラム塾生とは、「芸術祭について具体的な取り組みを一緒にやれることをやりたい」という想いもあるようだ。

第三回フラム塾に登壇した 映画監督 山岡信貴氏のご紹介☆

山岡氏の映画作品は国内外で評価が高く、これまでに世界各国（ベルリン・マドリッド・リオデジャネイロ・シンガポール・プサン等）で開催された国際映画祭に正式招待されています。

代表作は、難解さで知られるアーティストの荒川修作氏を見事読み解いたとして評価の高い『死なない子供　荒川修作』（2010）と、制作に５年をかけて臨んだ『縄文にハマる人々』（2018）。

今回のフラム塾では、十日町が縄文時代からの歴史ある地であることにも触れながら、アートや縄文を独自の感性で読み解いていたことが印象的でした。

（写真提供：映画『縄文にハマる人々』公式サイト©2018 rtapikcar,Inc.）

縄文土器を眺める　山岡信貴監督

映画監督　山岡信貴氏が語る☆荒川修作・縄文・アート

山岡氏によると、現代美術家の荒川修作氏は、「芸術×科学×哲学」という観点や「人間は死なない」という想いが創作の根幹にあり、独自の生命観で、「目でなく体全身を使って体感できる作品」を創作してこられたようです。（左上写真は荒川氏の代表作『三鷹天命反転住宅』）

山岡氏自身は、５年かけて制作した映画『縄文にハマる人々』について、荒川修作作品体験を経ての「縄文」だったと語ります。縄文時代については、「一万年も何をしていたの？」「一つの土器の形式が300年継承されてきた理由は？」「土器は使いやすい？作りやすい？意味は？超保守？創造性？」という疑問や「一万年以上持続した文明は世界的にも稀有である」という事実などから、「人間のすることのベースがアートで、人間のすることの手段が経済活動などだったのでは」という視点を持ち、「縄文時代が終焉を迎えて約2500年が過ぎたが、縄文時代のように、アートをベースにした取り組みを行ったら、今とは違う在り方の現代社会があるのではないか」ということを投げかけるような取り組みを重ねています。

山岡氏が切り取る様々なアート観は、「アートの語源はアーティフィシャル（人間の手が加わったもの）」ということを伝えてくださった北川氏の芸術祭への想いとも重なるように感じられました。（写真提供：『三鷹天命反転住宅』公式FBページ、映画『縄文にハマる人々』公式サイト©2018 rtapikcar,Inc.）

『三鷹天命反転住宅』
Photo by Masataka Nakano,© 2005 *Estate of Madeline Gins.* Reproduced with permission of the Estate of Madeline Gins.

☆編集後記☆

これまでのフラム塾では、「アートを手段にした地域づくり」についての学びを深めてきたと感じていました。

しかし今回は、「アートは人間が行うことのベースに在るもの」ということについて、考えさせられました。

もしかすると、このことの意味を理解して初めて、芸術祭の取り組みが地域づくりに繋がるのかもしれない、そんな気付きを得た第三回の講座だったように感じています。

兎にも角にも、作品誘致が叶いますよう、願うばかりです☆☆☆

※北川フラム塾とは、大地の芸術祭のこれまでとこれからについて、大地の芸術祭当初からの総合ディレクターである北川フラム氏より、一般の方が直接学ぶことができるオンライン勉強会です。北川氏の芸術祭への想いや取り組みを知ることで、「アートによる地域づくり」をより理解して、作品や取り組みを楽しめる内容となっています。詳しくは大地の芸術祭公式 HP をご覧ください。